

とに、研究のとりまとめを行った。

報 告 等

- 1) 渡辺邦夫 (1982) : スラウェシのムーアモンキー, モンキー 184 : 6-13.
- 2) Watanabe, K., and E. Brotoisworo (1982) Field observation of Sulawesi macaques. Kyoto University Overseas Research Report of Studies on Asian Non-Human Primates, 2. pp.3-9.
- 3) 渡辺邦夫 (1983) 闘争における連合, 遺伝, 37巻4号 : 17-24.

ニホンザル研究林

研究林実行委員会

本研究所には幸島野外観察施設があり、草分け時代からすれば、すでにほぼ30年の研究史を有し、完備した個体追跡資料を拠り所に、多彩な研究がつけられてきた。その学問的寄与は甚大であり、今後さらに発展が期待される。しかし一方ニホンザル本来の生息条件からすれば、孤立した1群が約30ヘクタールに生息するという箱庭のサンプルであることは否めない。多くの群れが連続分布し、群間関係をふくむ多様な生活が営まれるところこそ、ニホンザルが進化をつづけ、適応している舞台である。

幸島以外でも、高崎山・嵐山はじめ多くの野猿公苑、また餌づけされない純野生群についても観察等が行われ、相補って研究を発展させてきた。しかし野猿公苑は、一部を除いて研究者の管理外にあり、餌づけという条件以外にも、無数の限界があった。一方純野生群は、近年の森林開発と、それに関連する害獣化のもとに、年間捕殺数2000頭という数字が示すように、まことに不安定な状況におかれ、計画的研究が保証されない。

かかる状況下に、典型的なニホンザル生息地を、その生息環境とともに確保し、理想的な半永久的研究を可能にすべきだという、切実な願望がおこり、この研究林構想が打ち出された。

対象にしたのは、管理が国の責任で行われている国有林とし、ニホンザル分布の北限である下北、南限である屋久島、そして中核部としての中部、これには多雪の裏日本型を代表する上信越、群雪

の表日本型を代表する木曾を選び、計4地点がとりあげられた。それとともに各地点での準備的研究も開始された。

本計画は、頭記名による研究施設の準備段階として、1973年から特別事業費をえてすすめられてきた。1973年(昭和48年度)に下北、1978年(昭和53年度)に上信越、1981年(昭和56年度)に木曾の各研究林について予算がつき、共同利用研究所施設運営費として計上されるようになった。

幸島野外観察施設を発展解消し、5カ所から成るニホンザル野外観察施設を設けることは、本研究所の重大な任務であり、将来の野外研究の主軸を形成することであると、決意ならびに抱負を抱いている。

昭和57年度におけるニホンザル研究林関係の活動状況は次のとおりである。

1. 下北研究林

'82年12月10日から'83年4月10日までの期間に延べ107日間、全国各地から約40名の参加をえて、北西部の地域個体群を対象に、群れの遊動の追跡、個体数、構成、食物、群間関係などに関する集中調査を行なった。

その結果、地域個体群全体の個体数が初めて明らかになったほか、既知のM、Z、I群以外第4の群れ(Y群)があること、ポピュレーションの性、年齢構成、行動域、及び行動域のシフト(I、Z群)など多くの重要な知見をえた。

2. 上信越研究林

横湯川流域の seed trap による果実生産量・植生調査及び志賀C群の生態調査がひきつづいて行なわれた。又、春、夏の食物の栄養分析も継続して行なわれた。

研究林に隣接する雑魚川上流域における観光開発に対して監視が続行された。

3. 木曾研究林

田中 進(共同研究員)、泉山茂之(研修員)との共同研究として、従来からの群れの連続追跡が行なわれた。4月に上松町当局によりT群約60頭が捕獲されたが、そのうち8頭と、飼育中に生れた1頭、計9頭をもとの生息地に放ち、群れとしての存続を果たした。その後M群約15頭が、11月頃から、弱体化したT群の生息地の一部に移り住んだことが推定されている。大型のK群とS群に関しては変化がおこっていない。

猿害対策としては、感応式つまりサル自体がス

イッチを入れ煙火を爆発させる装置の実験を、11月、12月の2ヶ月間行い、実際にサルが12回煙火システムを作動させ、人手の行きわたらぬ山畑、とくにシイタケ畑などでの猿害化に対する有力な方法として、期待されることとなった。

4. 屋久島研究林

共同利用研究により、照葉樹林帯中上部と海岸域の食性の比較(上原・丸橋)、自然群の統合機構(古市・三谷)の研究がすすめられ、西部林道の群れの夏期の定期センサス(研究林・屋久島研究グループ)をおこなった。

「屋久島の生物的自然と地域社会との調和に関する研究」(代表・依田恭二、日本生命財団助成研究)によって、この地域の生態系の保全に関する基礎調査を行なうこととなった。1973-1976の屋久島研究グループによるヤクニホンザルの調査成果が雑誌にはんぎる5号に公刊された。

また、研究林予定地に隣接する瀬切川右岸域と永田灯台一瀬切間の海岸斜面の民有林が、それぞれ国立公園の第1種・第2種特別地域に編入、第1種特別地域に昇格することが決定した。この結果、国割岳西斜面と瀬切川流域を核として生態学的に有効な巾をもった垂直分布帯が保存されることとなった。

サル類保健飼育管理施設

竹中修鶴, 松林清明
後藤俊二, 松林伸子¹⁾

人工授精によって誕生を見たチンパンジーの子供のポポ、レオについては、レオの方は最初母親のレイコの哺育に不安が見られたが、飼育技術員(担当・熊崎)の調教により子供の抱き方を覚え順調に育てている。人工哺育によらざるを得なかったポポも、施設スタッフの努力により順調に育った。昭和58年春にいずれも一才の誕生日を迎えたが、ポポは体重6.7(出生時1.9)kg、レオも4.5(出生時1.48)kgに達した。

昭和55年度に発足した繁殖コロニーでは、昭和57年春～夏にアカゲザル28頭の出産(出生率61%)をみた。同年9月には8頭の子ザルを研究用に初めて供給した。1～2年後には定常的な研究使用

が可能になると思われる。

昭和55年度からサル施設の管理部分の飼育場所を6区画に分け、それぞれについて担当者を決め飼育を行って来ている。長期間同一区画のサルの飼育を担当することにより、飼育のレベルアップを意図したからである。同時に飼育技術員は通常の飼育業務、採血等の研究補助業務の他に、特定の施設業務活動を分担することになった。これには飼育、繁殖関係として1)チンパンジーの人工授精、人工哺育、2)室内計画繁殖、3)研究用ケージの設計・試作、また保健・診療関係として1)細菌検査、2)血液検査、3)病理検査、4)寄生虫検査等が含まれる。

人事では前任の千葉敏郎助教授の岐阜大学農学部教授への転出(昭和57年3月)に伴い、空席となった助教授を公募により求め、松林清明助手が昇格した(昭和58年6月1日付)。

研究概要

- 1) 雄ニホンザル性機能の季節的変化に関する形態学的ならびに生理学的研究

松林清明

性ステロイド濃度や精液性状の変動を調べると共に、各生殖腺の組織学的変化を光顕的・電顕的に行っている。

- 2) サル類の人工繁殖の研究

松林清明

チンパンジーの人工授精適期を把握するため尿中LHの簡易定量を行い、血中LHおよび性皮腫脹の推移との相関を調べている。

- 3) ニホンザルの成長に伴う眼内視所見の推移

後藤俊二

人工哺育及び母親哺育個体を対象として、単色光撮影法による眼底像の形態変化及び前眼部透光体の屈折率の変化についての継続観察を行った。

- 4) ニホンザル四肢奇形の原因探求

後藤俊二

血液検査を主とした臨床病理学的検討を共同研究の一環として進めている。

論文

- 1) Matsubayashi, K. and K. Mochizuki (1982): Growth of male reproductive organs with observation of their seasonal morphologic changes in the Japanese

1) 教務職員